

『巫子は夜を婀娜めく』

著:水戸 泉

ill:香林セージ

走り去るように夏が過ぎていく。セーレが現れて以来、明勢神宮の中は俄(にわか)に慌ただしくなった。

最強の魔神を召還した冬貴は、十六歳になるのを待たずして総領の座に就くことをすべての巫女や宮司に認められた。冬貴の髪には、総領巫女だけが挿(さ)すことを許される藤の簪(かんざし)が挿された。

が、それに反発したのは他でもない冬貴自身だ。冬貴は常々、総領巫女になどなりたくないと言っていたのだから。

総領になどなりたくないと言った冬貴が、いつ『真実』を口に出すかと秋羅は内心、肝(きも)を冷やしていた。今はまだ冬貴も、母である千夏の言うことだけは聞くからいいものの、それも長く続くとは思えない。

それになんとか秋羅には、総領になんかなりたくないと言った妹が不憫でもあった。(代われるものなら、代わってやりたいけれど)

それができないことは、最初からわかりきっている。巫女とはその字の如く、女しかなれないものだ。

慌ただしいのは、宮司である父・藤矢が、明勢神宮にセーレを得たことで、いよいよソロモンの指輪獲得へと具体的に乗り出したためだ。総領巫女の座に就いたとはいえ、十五歳の冬貴に采(さい)配(はい)が振るえるはずもない。地位は巫女に劣るものの、清家家が本腰を入れてソロモンの指輪を獲得しようとするれば、その陣頭に立つのは藤矢の他にいなかった。宮(きゆう)廷(てい)貴族の血を引く藤矢は、その出自に似合わず、野心家であった。

(ソロモンの指輪を獲得するには、七十二柱の魔神を支配下に置くことが必須条件で、うち一人でも召還されれば、それが呼び水となって他の魔神たちも現世に現れるって聞いたけど)

魔神の主となった者は、必然的に他の七十一柱の魔神とその召還主を斃さなければソロモンの指輪を得られない、という仕組みらしい。

つまり冬貴は(本当ならば秋羅は)、セーレを召還した時点でソロモンの指輪を巡る戦いへ参じることが運命づけられていたことになる。

厄(やっ)介(かい)なことに巻きこまれたものだと、秋羅は細い肩を落とした。あれから冬貴は総領巫女としての責務に追われ、秋羅に遊べと絡んでくることもしなくなった。正確には、しないのではなく、できないのだ。大人たちが冬貴を監視する目は、ますますもって厳しさを増した。対照的に、秋羅のほうは以前よりもずっと自由の利く身になっていた。

(獲得戦って、この前みたいな化け物と戦うんだらうか)

いくらセーレがついているとはいえ、それを冬貴にやらせるのかと想像するだけで秋羅の心は暗くなる。蛇骨婆に襲われた時の悲鳴が、耳に蘇(よみがえ)る。冬貴は気は強くても、ごく普通の少女なのだと秋羅はよく知っている。

午前のうちに修練を終えて、時間ができた秋羅は一人あてもなく庭を歩いていた。さすがに鎮守の森に近づく気にはなれないから、本殿のそばをうろうろする。

秋羅の黒い髪に、軽い何かが舞い落ちてきた。指でつまんで見てみると、それは桜の花弁だった。

(桜?)

もう葉桜も終わる季節に、なぜ花弁が落ちてくるのか。訝(いぶか)しみながら秋羅は上を見上げた。そして、花を降らせた張本人の姿を見つけ、少し呆(あき)れた気持ちになった。

「何をしているんだ、そんな所で」

秋羅が聞くと、セーレは桜の枝が降りかかる屋根から軽く飛び降りた。袴姿がすっかり様になっている。宮司の格好は動きにくいから嫌だと、セーレは頑なに拒んでいた。

セーレがいた箇(か)所(しょ)の枝だけ、桜の花が咲いていた。思わず目を細めて花に見とれた後、やはりこの男は怪異を操るのだなと秋羅は改めて感じた。

秋羅の髪に絡みついた花弁を指で払ってやりながら、セーレは質問に質問で返した。「おまえこそ散歩か？」

「そんなところだ」

急に暇になった秋羅とは違い、セーレは宮司や巫女たちに追いかけて回される身分だ。なのにセーレは、それから平然と逃げ回っているらしい。

冬貴とは違い、セーレはある程度、勝手気ままに振る舞うことを済(な)し崩(くず)しに許されている。召還主であるとされている冬貴以外は、セーレに命令する権利も力も持たない。秋羅には内心、そんなセーレが羨(うらや)ましい。

セーレは秋羅を、本殿の陰へ連れて行った。

「ちょっと聞きたいんだが」

「なんだ」

「総領巫女ってのは、なりたくない奴が無理してでもならなきゃいけないものなのか？」

当然、冬貴のことを言っているのだろうと察し、秋羅は少し返答に詰まった。同じことを自分も考えていたからだ。しかし秋羅には、本音で話す習慣がない。

「一族の繁栄のためならば、致(いた)し方(かた)ない」

「一族ったってなあ」

と、セーレは秋の訪れを感じさせる高い空を見上げた。

「具体的には、誰のことだ？ そういう理屈で得をするのは誰かって、考えたほうがいいぞ」

「おまえの御国には、そういう『仕組み』はないのか」

秋羅が話に乗ってきたことに、セーレは微(かす)かに喜色を浮かべる。が、それ以上何かを話すつもりはないらしい。

「あんまり古い話なんで、忘れちゃったわ」

「本当か？」

「本当だって。俺が人間だった頃は、こんな所に人なんか住んでなかったし、この国の人間はもっと原始的な生活してたぞ」

と、セーレは足元を指さした。どうやら彼が生を受けたのは、神(かみ)代(よ)の昔に

まで遡(さかのぼ)るらしい。

そう言われれば秋羅には、ますます話を聞きたくなかった。元は人間だったというのも興味深いし、神話の時代の話を直(じか)に聞ける機会など、又とない。

こういう時、どんなふうに話をねだればいいのかがわからなくて、秋羅は目を逸らしたままそわそわした。秋羅のそんな様子を、セーレは敏感に察知していたようだった。

不意に、日射しが翳(かげ)った。秋羅の目の前だけが。

視線を上げるとすぐ間近に、紅玉の眸(まゆ)が優しく笑っていた。秋羅はたじろぐこともなく、その眸を見つめ返す。

「キスしてくれたら、話してやるけど」

「きす？」

ふざけた口調で囁(ささや)かれて、意味がわからず秋羅は少し目を見開く。セーレははたと気づいたように言った。

「あ、洋語は通じねーのか」

セーレの言葉には、秋羅の知らないものもたくさんあって、秋羅は好奇心を刺激された。が、次にセーレがしたことには、好奇心などとても抱けなかった。

セーレは長身を屈(か)め、秋羅に顔を近づけた。

「こういうこと」

「な……っ！」

唇(くちびる)が、秋羅の唇を掠(か)めた。深く重ねられる前に秋羅は両手を突き出して、セーレを突き飛ばす。秋羅の突きなど蚊(か)に刺(さ)された程度にも感じないくせに、セーレはわざと大(おお)仰(ぎょう)に蹠(よ)踉(ろ)けてみせた。

千早(ちんはや)の袖(そで)で口元(くちもと)を拭(ぬぐ)いながら、セーレを秋羅は怒鳴(いか)りつけた。いくら秋羅が晩生(おくて)でも、《これ》が何(なに)なのかくらいはわかる。

「ふざけるな！ 男(おとこ)同士(どうし)で、することじゃないだろう！」

「それでもねえけど。あ、ちょっと待ちな」

いきなりセーレに口(くち)を塞(ふさ)がれ、木陰(きかげ)に引(ひ)つ張(は)られて、秋羅は悲鳴(かな)をあげそうになる。秋羅の本能(ほんのう)が、これはまずい事態(じたい)だと叫(こ)んでいた。

「や、やめ……ッ」

「誰(たれ)か来る」

本文 p72～77 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>